

伝え合う力を育む「スピーチ」単元の学習指導

～話す技術の観点を明確にした学習活動と「PSシート」の作成・活用を通して～

糸満市立糸満中学校教諭 宮平圭一郎

I テーマ設定の理由

グローバル化の進展や絶え間ない技術革新により、未来社会はますます予測困難になると考えられる。このような時代にあって学校教育には、他者と協働して課題を解決することや、様々な情報の見極め、知識の概念的な理解を実現し、情報を再構成して新たな価値につなげていくなど、未来の創り手となるために必要な資質・能力を育むことが求められている。

このような状況の下、全国学力・学習状況調査では、伝えたい内容や自分の考えについて、根拠を明確にして書いたり話したりすること、文章を読んで根拠の明確さや論理の展開、表現の仕方などについて評価することなどが長年の課題となっている。本校第1学年においても「自分の考えを組み立てて工夫して話す」に課題がみられ、平成29年告示中学校学習指導要領解説国語編（以下「解説国語編」と表す）においても「人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重し、言語を通して正確に理解したり、適切に表現したりする力を高める」とあり、「伝え合う力」を育む指導の充実が求められている。

「伝え合う力」を育むためには、話し手に相手意識を持たせ、聞き手にとって分かりやすく筋道の通った内容か、伝わりやすい表現かを意識させることが大切と考える。また、聞き手には、目的意識を持たせ、知りたい情報を聞き取るために、話し手の内容や問いかけに応じて反応することが重要と考える。

しかし、これまでの「話すこと・聞くこと」の指導を振り返ってみると、話し手は、相手の反応を見ることができず、一方的な発信になることがあった。また、聞き手も抽象的な感想が多く、質問や意見を返せないという状況が見られた。原因として、相手の反応を踏まえながら、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫することや、必要に応じて記録したり質問したりしながら話の内容を捉え、共通点や相違点を踏まえて、自分の考えをまとめる指導が不十分だったことが考えられる。

そこで、本研究では、話し手がスピーチの内容・構成を考えたり、相手の反応に応じて表現を工夫したりするためのPSシート（ポートフォリオ型スピーチシート）を作成・活用し、話す技術の観点を明確にした学習活動を設定することで、伝え合う力を育むことができるだろうと考え、本テーマを設定した。

II 研究仮説と検証計画

1 研究仮説

国語科の第1学年「スピーチ」単元の学習において、PSシートを作成・活用し、話す技術の観点を明確にした学習活動を設定することで、伝え合う力を育むことができるだろう。

2 検証計画

標準学力検査や全国学力、学習状況調査の結果、国語に関するアンケート調査等から、生徒の実態調査、分析、把握を行う。検証授業は1年5組で11時間実施し、授業観察、生徒のスピーチの様子、ワークシートの記述と変容、振り返り、授業記録により伝え合う力を育むことができたか考察する。単元終了後にもアンケートを実施し、事前調査との比較・分析を行い、仮説を検証する。

検証授業の対象：糸満中学校 1年5組 (男子14名 女子16名 計30名)		主な検証方法
1 事前調査	○各調査の結果分析(10月) ○国語に関する事前アンケート(11月)	・事前アンケートの分析
2 検証授業	日程	検証の観点 話し手 ・自分の考えが明確になるような話の構成か。 ・聞き手を意識した表現か。
	・第1時 (1/7) ・第7時 (1/21) ・第2時 (1/8) ・第8時 (1/22) ・第3時 (1/9) ・第9時 (1/24) ・第4時 (1/10) 検証授業 ・第5時 (1/11) ・第10時 (1/25) ・第6時 (1/15) ・第11時 (1/25)	
3 事後調査	○事後アンケート(1月)	・事後アンケートの分析 ・ワークシートの評価 ・授業記録の分析
4 まとめ	・自分の考えが明確になるように話の構成の検討ができたか検証する。 ・聞き手に分かりやすく伝わるように表現を工夫したりすることができたか検証する。	・事前事後アンケートの比較、分析

Ⅲ 研究内容

1 伝え合う力を育むための学習指導

(1) 中学校国語科の目標と伝え合う力

平成29年告示中学校学習指導要領において、国語科では「言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力の育成」を目指すことが示され、育成を目指す資質・能力が、

(1)「知識及び技能」、(2)「思考力、判断力、表現力等」、(3)「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理された(表1)。言葉による見方・考え方を働かせるとは、「生徒が学習の中で対象の言葉、言葉と言葉の関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めること」とし、言葉による見方・考え方を働かせることが、「国語科において育成を目指す資質・能力をよりよく身に付けることにつながる」と示されている。また、解説国語編において、(2)の、「思考力、判断力、表現力等」に関する目標の「伝え合う力を高める」とは、「人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重し、言語を通して正確に理解したり、適切に表現したりする力を高めること」と述べられている。

表1 中学校国語科の目標

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力の育成を次のとおりで育成することを目指す。 (1) 社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。 (2) 社会生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う。 (3) 言葉がもつ価値を認識するとともに、言語感覚を豊かにし、我が国の言語文化に関わり、国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

(2) 第1学年における「話すこと・聞くこと」について

表2 「話すこと・聞くこと」における

小学校第5学年及び6学年・中学校第1学年・2学年の指導事項

学年 学習過程	小学校 第5学年及び第6学年	中学校 第1学年	中学校 第2学年
構成の検討、考えの形成(話す)	イ 話の内容が明確になるように、事実と感想、意見とを区別するなど、話の構成を考えること。	イ 自分の考えや根拠が明確になるように、話の中心的な部分と付加的な部分、事実と意見の関係などに注意して、話し構成を考えること。	イ 自分の立場や考えが明確になるように、根拠の適切さや論理の展開などに注意して、話の構成を工夫すること。
表現、共有(話す)	ウ 資料を活用するなどして、自分の考えが伝わるような表現を工夫すること。	ウ 相手の反応を踏まえながら、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫すること。	ウ 資料や機器を用いるなどして、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫すること。
構造と内容の把握、精査・解釈、考えの形成、共有(聞く)	エ 話し手の目的や自分が聞こうとする意図に応じて、話しの内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめる。	エ 必要に応じて記録したり質問したりしながら話の内容を捉え、共通点や相違点などを踏まえて、自分の考えをまとめること。	エ 論理の展開などに注意して聞き、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをもとめること。

解説国語編における第1学年の「思考力、判断力、表現力等」の目標は「筋道を立てて考える力

や豊かに感じたり想像したりする力を養い、日常生活における人との関わりの中で伝え合う力を高め、自分の思いや考えを確かなものにすることができるようにする。」と示され、話し手が伝えたいことを話したり、聞き手が質問したり、意見などを述べたりする言語活動を通して指導するよう求めている。本研究では「構成の検討、考えの形成（話すこと）」、「表現・共有（話すこと）」、「構造と内容の把握、精査、解釈、考えの形成、共有（聞くこと）」の学習過程の中で、特に「表現・共有（話すこと）」における話し手の資質・能力の育成に重点を置き指導を行う。その際、当該学年だけではなく小学校第5学年及び6年、中学校第2学年の指導事項も系統的に指導を行う（表2）。

2 話す技術の観点の明確化について

(1) 話し手の技術と聞く意識について

河野・宗我部（2011）は「話し言葉の場合、書き言葉と違って話している最中にも様々な反応をする『相手』が目前にいる。『どう伝わっているか、どう理解されているか』を相手の反応を通して考えていくこと」が重要であるとし、「相手意識」の重要性を述べている。また、『声と言葉』による伝達を中心に置きつつ、配布物やスライドを見せる等、より効果的に伝えるための工夫が必要だと述べている。表3に堀（2003）の提唱する5系列20の技術をまとめた。

「聞く」場合、聞くという行為の実態も多様になる。例えば、漏らさず聞く、選択的に聞く、要約して聞く、分析的に聞く等というように目的や場によっても変わってくるであろう。つまり、聞き手も漠然と音声聞くのではなく「目的意識」を持つことが重要になると考える。そこで、本研究では話し手の「話す」技術を上げるためには聞き手の「聞く」意識も高める必要があると考え、興味を示す聞き手がいるから話し手も話す意欲が上がるという視点から、小学校からの指導要領の「聞く」の指導事項に焦点化し系統的に「聞く意識」を表にまとめた（表4）。

(2) 生徒同士の評価活動

実際のスピーチ発表会になると声が小さくて聞こえないという展開がよくある。理由は様々あるが、緊張で声が出ない、聞き手に声を届ける必要性を感じていない等の理由が考えられる。堀はその状況に対し、『心構え』の部分の指導を重視して、授業構想自体を改める必要がある」とした上で、「対話」の重要性を述べている。「一対一の対話ならば、二人の間によほどの偏った力関係でもない限り、緊張を伴うことはない。」とし、対話で自信を持たせてスピーチに取り組むことが大事であり、そこから新たな課題を見いだして、また「対話」で練習するといった繰り返しが子どもたちの意欲と技術を高めると述べている。本研究では一対一から、一対少数のグループへと展開し、話す技術の観点を明確にした評価カード（資料1）を用いてお互いに評価し合うことで課題認識とその克服を図り、相手の反応を踏まえた表現

表3 5系列20の技術

話す技術	
基礎系列	①姿勢…相手に対する印象をつくる。発声発音の基礎。 ②呼吸…たっぷり息を吸うことで良い声をつくる。 ③発声…聞く人全員に内容が正確に伝わる大きさ。 ④発音…正しい口形で明瞭な発音。
抑揚系列	①声量…声量に強弱等の変化をつけ、抑揚をつける。 ②声速…声速に高低等の変化をつけ、抑揚をつける。 ③速度…速度に変化をつけることにより、抑揚をつける。 ④間…言葉を区切ったり、適切な間を工夫したりする。
構成系列	①双括型…結論を最初と最後に述べる。 ②ナンバリング…話す事に「通し番号」をつけ整理する。 ③ラベリング…見出しを提示する。 ④枕の工夫…冒頭を工夫して聞き手をひきつける。
叙述系列	①エピソード…具体例や自分の体験談を入れる。 ②データ…アンケートの結果等数字を提示する。 ③オブジェクション…反論や例外をあらかじめ想定する。 ④ツール…実物や提示資料を活用する。
聴衆系列	①アイコンタクト…聞き手に視線を向ける。 ②ジェスチャー…身振り手振りを交えてひきつける。 ③ダイアログ…相手とのやりとりと交流。 ④ユーモア…聞き手をリラックスさせる「笑い」。

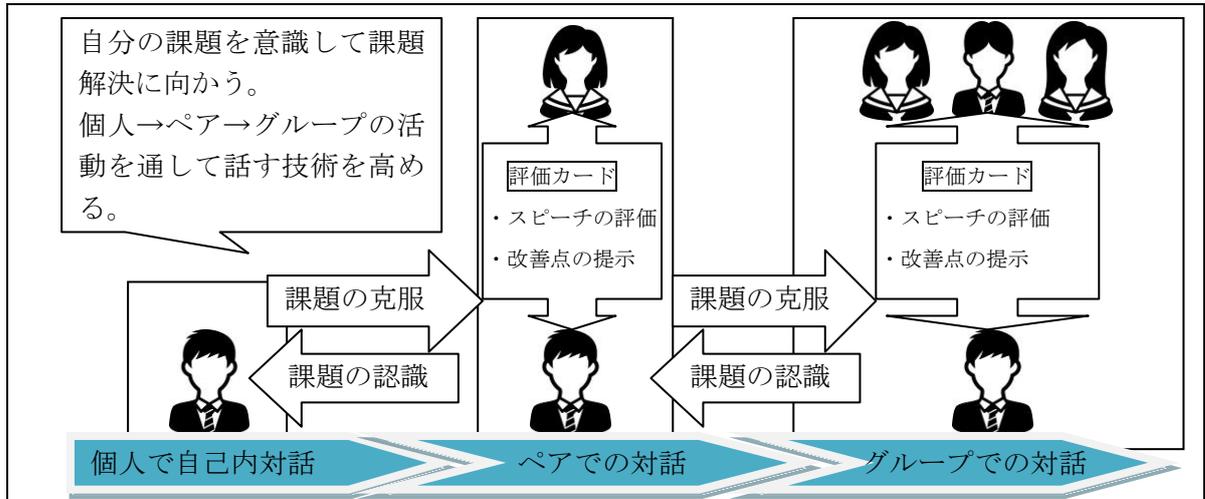
表4 聞く意識

①話し手の表情を見ながら最後まで集中して聞く。
②うなずいたり、声に出したりして反応する。拍手。
③目的を明確に持って聞く。
④記録を取りながら聞く。
⑤事実と感想、意見と区別して聞く。
⑥自分の考えと比べながら聞く。
⑦話しの展開を予測して聞く。
⑧内容に関する感想や意見を持つ。
⑨疑問や確かめたいことを質問する。
⑩内容や表現の仕方を評価する

評価カード(話す技術の観点)	
・聞き手に視線を向けていたか	(A B C D)
・聞き手の反応を見ていたか	(A B C D)
・適切な声の大きさが	(A B C D)
・聞きやすい速度が	(A B C D)
・適切な強弱が	(A B C D)
・適切な間が	(A B C D)
・問いかけや反復等の工夫があったか	(A B C D)
☆良かった点	★改善点

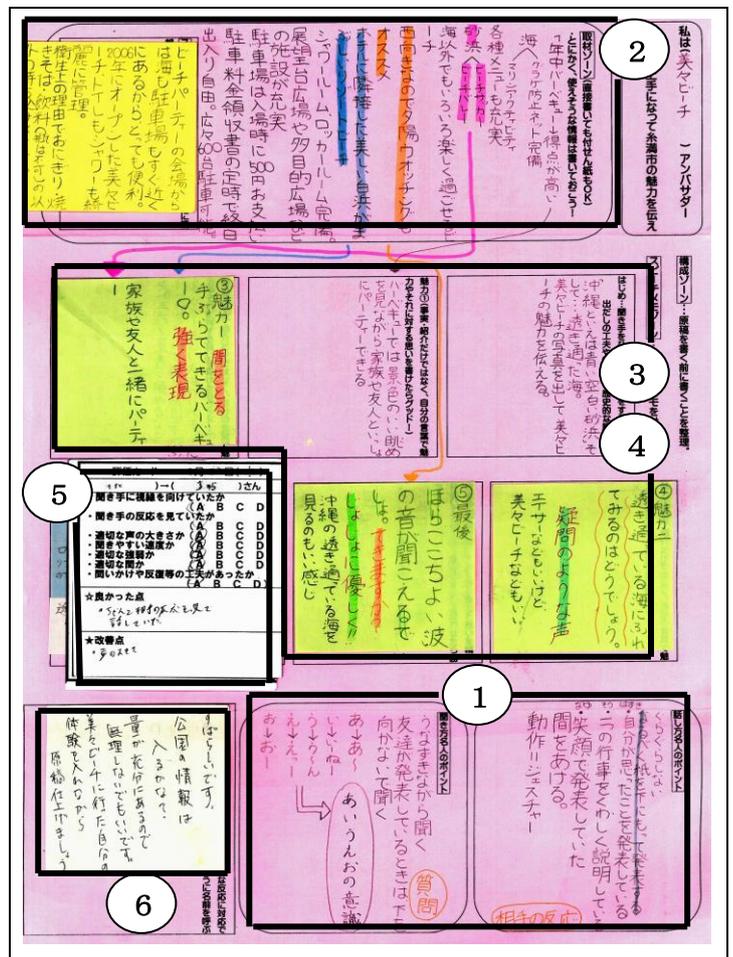
資料1 評価カード

の工夫を目指す（図1）。個人としては自己内対話を繰り返して自分の課題を改善し、次にペア、グループと聞き手を増やしていき、評価の目を増やすことで新たな課題に気付かせる。更に課題を克服する活動を繰り返すことで話す技術を高め、適切な表現になるように目指す。



(3) スピーチシートの作成と活用

「話すこと・聞くこと」の学習において稲田（2017）は「読む力、聞く力を駆使して情報を収集する。それを自分のテーマに合わせて、どのような構成でどのように表現するかを検討する。」と述べ、学習過程で自らの考えと表現が形成されて進化すると提言している。それを受けて、情報収集、構成、表現の工夫、グループからのアドバイス、振り返り等が一枚の用紙の中でできるように「ポートフォリオ型スピーチシート（PSシート）」（資料2）を作成し活用した。PSシートは①から⑥のゾーンで構成する。①は「話し方名人・聞き方名人になるには」とし、話す技術の観点、聞く意識をまとめる。実際の自分のスピーチの現状からゴールを意識させ、適宜、付け加えたり、振り返りで使用したりする。②は「取材ゾーン」として収集した情報を書かせる。糸満市の魅力や自分の主張の根拠となる情報を記述する。③は「構成ゾーン」とし取材した材料を基に原稿の構成メモを考える際に活用し、原稿を仕上げた後は④「スピーチの柱ゾーン」として活用し、スピーチの柱を付せんを書いて構成メモに添付する。原稿ではなく、このスピーチの柱を見ながらのスピーチとなるので、大事な内容や表現の工夫を記述する。⑤はペアやグループからの評価を貼り、自分のスピーチの良い点、課題点などが認識できるようにする。また、練習を重ねていくことによって、より良いスピーチになっていくこと



より良いスピーチになっていくこと

が実感できるようにする。⑥は教師からのアドバイスを毎時間書くことで、関心意欲を高め、次にやることを明確にする。

IV 検証授業

1 単元名 「私は〇〇アンバサダー」スピーチ上手になって糸満市の魅力を紹介しよう

2 教材名 フリップを用いて報告する（教育出版 1年）

3 単元設定の理由

(1) 教材観

生徒は小学校第6学年時に「町の幸福論」という教材で「目的や意図に応じて、事柄が明確に伝わるように話の構成を工夫しながら、場に応じた適切な言葉遣いで話すこと」は学習しており、その授業において、自分の住む糸満市の未来を考え、意見を発表することを経験している。

本単元は糸満市を題材にして、相手意識、目的意識を持つことに留意してスピーチする教材を扱う。特に話し手が相手意識を持てるように、原稿ではなくスピーチの柱を見ながら、目の前にいる聞き手へ視線を向け、より相手を意識し、話す技術を身に付けられる教材になっている。また、相手の反応を見て、言葉の調子や間の取り方、反復や言葉を言い換えること等ができるようにペアやグループで活動する場面を設定している。

(2) 生徒観

本校第1学年においては、全国学力・学習状況調査の結果から「自分の考えを組み立てて工夫して話す」に課題がみられ「話すこと・聞くこと」の指導の充実が求められている。また、生徒アンケートを見ると、40%近くの生徒が「話すこと・聞くこと」に苦手と回答し、人に自分の考えを伝えたり、人の考えを聞き取ったりすることを難しいと感じている。またその中でも「相手の反応を意識して話しているか」、「相手の反応を見て表現を工夫しているか」の項目においては65%以上の生徒が「どちらかといえばあてはまらない、あてはまらない」と回答している。

実際の授業においても、話し手は、相手の反応から自身の話し方を改善するまでには至らず、一方的な発信になり、聞き手も話し手の説明に対して自分が思ったことや考えたことを返すことができず、受信する一方だった。その課題から、本単元では話し手には「構成の検討、考えの形成」、「表現、共有」、聞き手には「構造と内容の把握、精査・解釈、考えの形成、共有」の指導を行い、両者に相手意識、目的意識を持たせながらスピーチできるように取り組む。

(3) 指導観

本単元では特に話し手が相手意識を持ってスピーチすることを目指している。そこで、単元の学習過程を学習指導要領に沿って「課題設定」、「情報の収集」、「構成」、「表現」とした。また、PSシートを作成し、学習過程が一枚のシートで完結できるようにし、中心的な部分と付加的な部分を意識させて、構成メモを考えたり、スピーチ原稿をもとにスピーチの柱を作成したりできるように工夫した。今までのスピーチにおける話し手の課題である相手の反応を見られないという点は、自分の「話す」現状を知る活動を行うことを足がかりに指導していく。原稿を読むことで精一杯になり、相手を意識していないことに気付かせ、今後の学習で必要なことを気づかせたい。個人、ペア、グループでのスピーチ練習においては、動画を撮影しその動画を用いたフィードバックを適宜取り入れ、自身の話す様子や聞き手の反応等を確認してアドバイスし合う活動を取り入れることで、話し手の技術向上をねらう。また、話し手の技術や意欲を伸ばすには、興味を持った聞き手が必要不可欠だと考え、相づちや感嘆、拍手をする工夫を取り入れた。

4 単元の指導目標

(1) 単元の目標

- ・ 課題について主体的に取り組み、相手意識、目的意識を持つことに留意して、スピーチに取り組もうとしている。(関心・意欲・態度)

- ・ 自分の考えや根拠が分かるように、話の中心的部分と付加的な部分を明確に構成して、話すことができる。(話すことイ)
- ・ 相手の反応を見ながら言葉を選択したり、声の調子や間の取り方等に注意したりしながら話すことができる。(話すことウ)
- ・ 相手の反応を見ながら反復して表現したり、言葉を言いかえたりするなど、表現の技法を理解し使うことができる。(伝国オ)

(2) 評価規準

国語への関心・意欲・態度	話す能力	言語についての知識・理解・技能
広報誌を活用し、自分のアイデアを相手にスピーチする言語活動を通じた指導		
①課題について、主体的に取り組み、相手意識、目的意識を持つことに留意してスピーチに取り組もうとしている。	①自分の考えを中心的部分と付加的な部分を明確にして構成して話している。(イ) ②相手の反応を見て、声の調子や間の取り方等を工夫して表現している。(ウ)	①相手の反応を見て、適切な表現技法を使っている。(オ)

(3) 単元の指導・評価計画 (全 11 時間)

	時	学習活動 ○ねらい	評価方法・検証の視点
課題設定・単元の見直し	1	<p>○学習課題と学習の見直しを持つことができる。</p> <p>①事前に書かせた「糸満市の魅力をアピールしよう」という原稿を基に実際スピーチしてみる。学習課題に気付く。</p> <p>②スピーチの設定の確認。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手→友好都市の網走市の中学生が目の前にいる ・目的→糸満市の魅力を伝えるために。 <p>③グッドモデルの動画を見て、気付いたことを発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・効果的な話し方を理解し、単元のゴールをイメージする。 <p>④学習の見直しを立てる。</p>	<p>〔関心、意欲、態度①〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習課題を理解し、学習の見直しを立てることができる。 <p>PSシート (話し方名人・聞き方名人のポイント)</p>
取材	2	<p>○アピールするための情報を集め、まとめることができる。</p> <p>①情報を資料から収集する</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の担当するものの魅力と<u>思いを伝える</u>ことを意識する。 <p>②集めた情報を付せんを使って取材ゾーンにまとめる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・取材はただ丸写しするのではなく、<u>要点のみ書き出す</u>。 	<p>〔関心、意欲、態度①〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・必要な情報を集めることができる <p>PSシート (取材ゾーン)</p> 
構成	3 4	<p>○取材した情報を基に構成を考えることができる。</p> <p>①集めた材料を精選し構成を考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・興味をひく出だしを考える ・構成ゾーンに記述する内容を書く。 <p>②構成途中の段階でグループで交流する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手の表現を参考にする。 <p>③原稿用紙にスピーチ原稿を記述する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・構成ゾーンを基にスピーチ原稿を記述する。 ・中心的部分と付加的な部分を区別しながら記述する。 ・一番紹介したいものとそれを支える情報を結びつけて記述する。 	<p>〔話すこと①イ〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・集めた材料を組み合わせ構成を考えている。 <p>〔知識・理解・技能①オ〕</p> <p>PSシート (構成ゾーン)</p> 
表現	5	<p>○原稿からスピーチの柱にすることができる。</p> <p>①スピーチの柱の方法を理解し、スピーチの柱を作る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・効率的な柱の作り方を確認する。 ・要点を押さえてP・Sシート (構成ゾーン) に付せんで貼る。 ・表現の工夫も書く。 	<p>〔話すこと②ウ〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・相手に伝わりやすいような表現を考えている。 <p>〔知識・理解・技能①オ〕</p>

		②スピーチの柱を基に自分で練習する。 ・順番を並べ替えたり、表現を自分なりに工夫したりする。 ・スピーチの柱を自分で添削する。 ・ペアで交流する。	PSシート（構成ゾーン）
	6	○グループでスピーチし、アドバイスし合うことができる① ①スピーチの柱を基に自分で練習する。 ・順番を並べ替えたり、表現を自分なりに工夫したりする。 ・メモを自分で添削する。 ・ペアで交流する。 ②グループでスピーチする。 ・お互いに聞き合い、評価カードを活用し、良い点、改善点、疑問、質問を出しアドバイスしあう。 ③動画を見て振り返る。	[話すこと②ウ] ・相手に伝わりやすい構成と表現でスピーチしている。 [知識・理解・技能①オ] PSシート（スピーチの柱ゾーン・アドバイズゾーン・聞き方名人のポイント） ・評価カード
	7	○グループでスピーチし、アドバイスし合うことができる② ①前時の動画から聞き手の役割について考える。 ・グッドモデルでは聞き手が反応していたことを思い出させる。 ・良い聞き手、悪い聞き手を例を用いて体験する。 ②グループでスピーチする。 ・アドバイスを基にスピーチを修正し、グループでスピーチする。 ・聞き手は実際に反応し質問する。必要に応じてメモを取る。 ③違うグループでスピーチする。 ・聞き手は質問したりアドバイスしたりする。 ・評価カードを活用しお互いを評価する。	[話すこと②ウ] ・相手に伝わりやすい構成と表現でスピーチしている。 [知識・理解・技能①オ] PSシート（スピーチの柱ゾーン・アドバイズゾーン・話し方名人のポイント） ・評価カード
	8	○グループでスピーチし、アドバイスし合うことができる③ ①評価の観点の確認、相手意識、目的意識の確認。 ②動画を見て振り返る。 ③個人で前時の評価を振り返り、スピーチ練習する。 ・評価カードを振り返り、本時の練習に活かす。 ④グループでスピーチする。 ・聞き手は質問したりアドバイスしたりする。	[話すこと②ウ] ・相手に伝わりやすい構成と表現でスピーチしている。 [知識・理解・技能①オ] PSシート（スピーチ柱ゾーン・アドバイズゾーン） ・評価カード
表現全体	9 10	○相手の反応を踏まえて、スピーチすることができる。 ①話し手はスピーチの柱を基にスピーチする。（スピーチの柱ゾーン） ・相手の反応に合わせて表現する。 間をとる、強弱、問いかけ、フリップ、ジェスチャー、ユーモア… ②聞き手は反応する。 ③スピーチの評価をする。	[話すこと②ウ] ・相手の反応を見て工夫して表現している。 PSシート（スピーチ柱ゾーン） ・評価カード
まとめ	11	○スピーチを振り返りことができる。 ①自分の発表を振り返る。 ・個人でスピーチを振り返り、良かった点、改善点を見直す。	[関心、意欲、態度①] 観察 ・評価カード

5 本時の指導（第9・10時／全11時間）

(1) 本時の指導目標

相手の反応を見ながら言葉を選択したり、声の調子や間の取り方等に注意したりしながら話することができる。

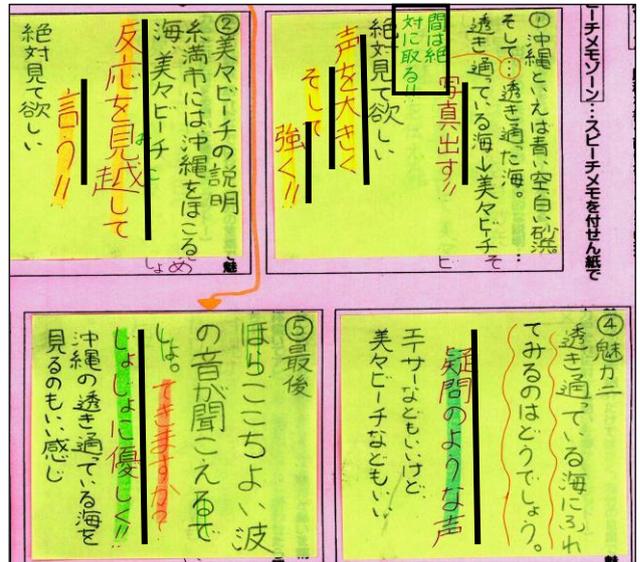
(2) 本時の授業展開

過程	学習活動（内容・発問）	○指導上の留意点 ★予想される生徒の反応	○評価規準・方法 ★Cへの手立て
導入 10分	① 前時までの振り返りとめあての確認 ・発声練習 ・話し手の相手意識を確認する。	○教室を二分割して前後でスピーチさせる。 ○話し手、聞き手の意識を仕方を思い出させる。	※定点カメラを2台設置する。 
	相手の反応を見て表現を工夫し、糸満の魅力をスピーチすることができる。		
展開 30分	② 一斉練習 ③ 話し手は糸満の魅力をスピーチする。 ・PSシートのメモを活用してスピーチ		[話すこと②ウ] ○話し手は相手の反応を踏まえて表現の工夫（音量や話す速度、強弱、間

えるため」という目的意識を持つことが内容の工夫にもつながるといことが資料3・4から推察される。資料3はスピーチの学習に入る前に書かせた原稿である。資料4は構成の仕方と相手意識、目的意識を持たせたあとの原稿である。糸満市の魅力として「ハーレー」をともに書いているが、指導後は「ハーレー」を知らない県外の人へ向けた内容になっていることから相手意識を持つことができた。また、その魅力が順序立てて書かれていることから目的意識が明確であることが分かる。傍線部は、ハーレーを知らない人に対してスピーチする想定で書かれており、□部分はナンバリングされ聞いていても分かりやすい書き方になっている。

③ 表現の工夫について

目の前に網走市の中学生がいるという設定でスピーチに取り組んだ。また、相手の反応を踏まえて表現することが本単元の目標であるため、相手に視線を向けて、どんな表情で聞いているのか、どんな様子なのかを見極めさせた。どの部分に強弱をつけるか、どこで間を取るか等をスピーチの柱として付せんに書き、練習することで、相手への意識が高まる様子が見られた(資料5)。個人→ペア→グループでの練習を通して、自分の課題に気付き、課題の克服に向けてどうしたらよいか等を意見交換する場面の設定やスピーチ後に聞き手からの評価カードを基に自分の課題を認識することで、質の高いスピーチにしようとする様子が見られた。



資料5 スピーチの柱

(2) 話す技術の観点の明確化について

① アンケート結果から

スピーチするにあたって「話す観点」を評価カードで明確にした。それを基に個人、ペア、グループでの段階を通してスピーチを磨く学習に取り組んだ。図2、3、4は検証授業後に113人にとったアンケート結果である。図2「話す観点はスピーチするのに役立ったか」というアンケートで「あてはまる・どちらかといえばあてはまる」と答えた生徒は93%であった。理由としては「話す観点を見て、話す工夫を考えることができたから」や「練習の時に上手くいかない場合、観点を意識すると上手くできたから」、「観点を意識してスピーチした方が相手に伝わったと実感したから」などがあり、観点を明確にすることは、スピーチする際の工夫の仕方や自分のスピーチ力を高めるための効果的な手段だった考えられる。図3「相手からの評価は自分のスピーチの課題が分かるものだったか」の設問に「あてはまる・どちらかといえばあてはまる」と答えた生徒が96%だった。「人それぞれ違う評価だけど、自分の改善点があった」や「直すべき所が分かり次に活かせる」等が主な理由である。前述した「話す観点」を評価の観点として評価カードに取り入

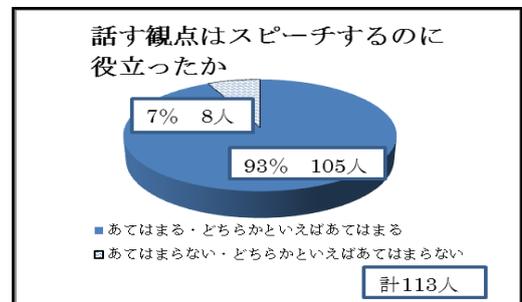


図2 「評価」に関するアンケート①

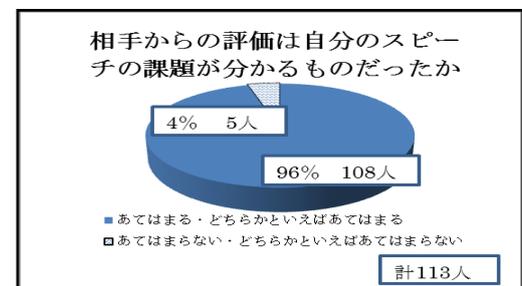


図3 「評価」に関するアンケート②

れたことで、自分の改善点を認識し、受け入れたと考えられる。図4「相手からの評価を活かしてスピーチをより良くできたか」では85%の生徒が「あてはまる・どちらかといえばあてはまる」と答えた。主な理由に「できなかったことができるようになった」や「評価カードから自分の欠点を意識したから」が主な理由であった。スピーチの課題と克服の方法が評価カードから明確にされ、スピーチの改善に取り組めたことが分かる。さらに、今回は360°カメラを活動の中に取り入れ、話し手と聞き手の様子を撮影し、授業の振り返りで活用することで、客観的な目線で自分や友人のスピーチを見られるようにした(写真1)。実際の動画を見ながら、良い点・改善点を全体で確認することがスピーチの質を上げることに効果的だったと思われる。また、生徒達の評価の目を鍛える場にもなったと考えられる。その他に「大人になってスピーチするときに使えそう」や「高校の面接で使いたい」、「他の授業で活かしたい」と肯定的な意見もあったことから話す観点を明確にして客観的に評価をしあうことは伝え合う力を育むことに効果的であったと考える。

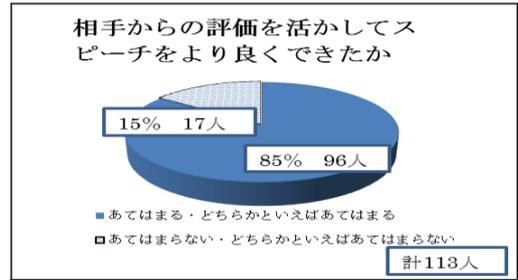


図4 「評価」に関するアンケート③



写真1 360°カメラによる評価

② 生徒の評価カードと感想から

<p>聞き手に視線を向けていたか (A B C D)</p> <p>聞き手の反応を見ていたか (A B C D)</p> <p>適切な声の大きさか (A B C D)</p> <p>聞きやすい速度か (A B C D)</p> <p>適切な強弱か (A B C D)</p> <p>適切な間か (A B C D)</p> <p>問いかけや反復等の工夫があったか (A B C D)</p> <p>★良かった点 声の大きさがほぼよい</p> <p>★改善点 視線をもう少し相手の方に合わせた方がいい</p>	<p>聞き手に視線を向けていたか (A B C D)</p> <p>聞き手の反応を見ていたか (A B C D)</p> <p>適切な声の大きさか (A B C D)</p> <p>聞きやすい速度か (A B C D)</p> <p>適切な強弱か (A B C D)</p> <p>適切な間か (A B C D)</p> <p>問いかけや反復等の工夫があったか (A B C D)</p> <p>★良かった点 いきいきしていきいきと聞きやすかった。問いかけがよかった。</p> <p>★改善点 少し下を見るのが多かったです。気がします。</p>	<p>聞き手に視線を向けていたか (A B C D)</p> <p>聞き手の反応を見ていたか (A B C D)</p> <p>適切な声の大きさか (A B C D)</p> <p>聞きやすい速度か (A B C D)</p> <p>適切な強弱か (A B C D)</p> <p>適切な間か (A B C D)</p> <p>問いかけや反復等の工夫があったか (A B C D)</p> <p>★良かった点 相手の反応を見ていたので良かった点かなと思う。</p> <p>★改善点 自分がまちがえた時速度が速いからあちついたほうがいいと思う。</p>
<p>「聞き手に視線を向けていたか」の項目でC→B→Aと評価が上がっている</p> <p>「聞き手の反応を見ていたか」の項目でB→B→Aと評価が上がっている。</p>		<p>相手の反応を見るのが課題であるが、スピーチの活動を重ね克服している。</p>

資料6 評価カードの実際

<p>睦月二十一日(月) 今日のめあて スピーチ名人の観点を基に スモールでスピーチすること</p> <p>今日の授業で何がわかりましたか。 私の話す速度が早すぎたりすること</p> <p>感想・疑問 速度を考慮して話すようにしたいと思った</p>	<p>睦月二十一日(火) 今日のめあて 評価をいかし表現をより よくするためにスピーチすること</p> <p>今日の授業で何がわかりましたか。かたがた 私が間違えると、話し言葉が見えること と、私の話し声が大きすぎるということ</p> <p>感想・疑問 前回より評価が高くなったので、 次はすべて改善できるようにしたい</p>	<p>睦月二十四日(木) 今日のめあて 相手の反応を見ながら表現 を工夫してスピーチすること</p> <p>今日の授業で何がわかりましたか。 改善できた点と新しい改善点が見つかった</p> <p>感想・疑問 いつも気になっていた声の大きさと相手に視線を向けることをがんばりました。</p>
--	---	--

資料7 授業の振り返り

資料6、7は同じ生徒の評価カードと振り返りである。ペアやグループでのスピーチを通して良い点と改善点をコメントでもらい、意識して取り組むことで課題を克服していく様子が見られる。練習1回目の「視線を前に向けたほうがいい」というアドバイスを基に改善していることから評価する活動は効果があると捉える。振り返りの中からも次の課題の克服を目標に意欲的に取り組んでいることが分かる。また、学習の中でも各自課題の克服に取り組んでいる様子が随所に見られた。更に、自ら課題を聞き手に申告することで、より厳しい目での評価を求めるといった主体的に取り組む姿も見られた。

(3) 相手の反応を踏まえた表現の工夫について

① アンケートの結果と生徒の感想から

図5、6は検証前、後を比較したアンケート結果である。図5「相手の反応を意識して話しているか」に対して「あてはまる・どちらかというあてはまる」と答えた生徒は検証前の30% (32人) から、検証後は75% (85人) と45Pt増加したことから、スピーチの学習を通して、相手を意識し伝え合おうとする意欲が高まったと考えられる。

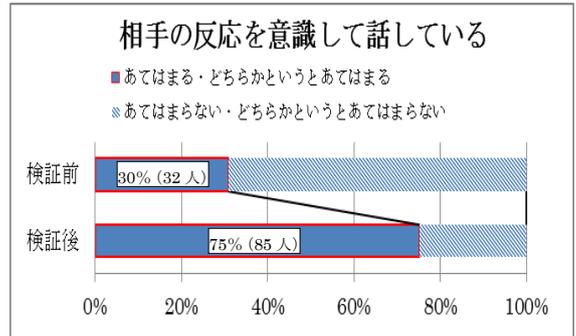


図5 表現の工夫についてのアンケート①

図6「相手の反応を見て表現を工夫している」のアンケートからは「あてはまる・どちらかというあてはまる」答えた生徒は検証前の38% (40人) から検証後は64% (73人) と26Pt増加したことから、今回のスピーチの学習は伝え合う力を育むことに効果があったと考えられる。しかし、「話すこと・聞くことの学習活動の中で難しいと思うことは何か」という項目では60人の生徒が「相手に分かりやすく伝えること」と答えていたが、検証前と検証後で数値にほぼ変化がなかった。

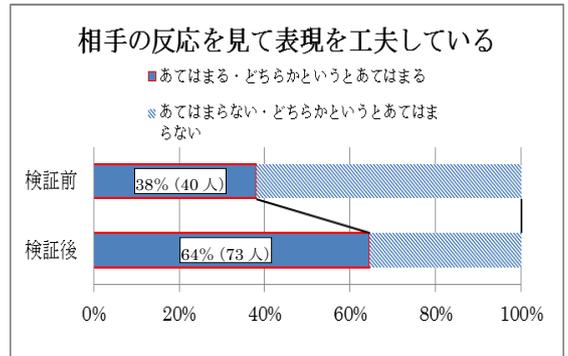


図6 表現の工夫についてのアンケート②

そのことから、「相手の反応を意識した、相手の反応を見て表現の工夫はした」が、「分かりやすく伝えること」には自信がまだなく、難しさを感じているということが伺える。最終時の単元の振り返りではスピーチに対して「前の自分とは違う」、「原稿を見ないでスピーチすることで相手の反応をみることができた」、「今までは分からなかった自分の弱点があった」という肯定的な感想が多くあったが、逆に前述の通り、「視線を向けることは意識したが、反応を見るのは難しかった」等の感想もあり、今後の授業改善の余地も見られた。また、聞き手からは「話し手がこちらの反応を見てくれたので、聞き手として、きちんと聞かないといけないという気持ちになった」とあり、話し手次第で聞き手の興味を引き付けることができることを気付かせることができた。

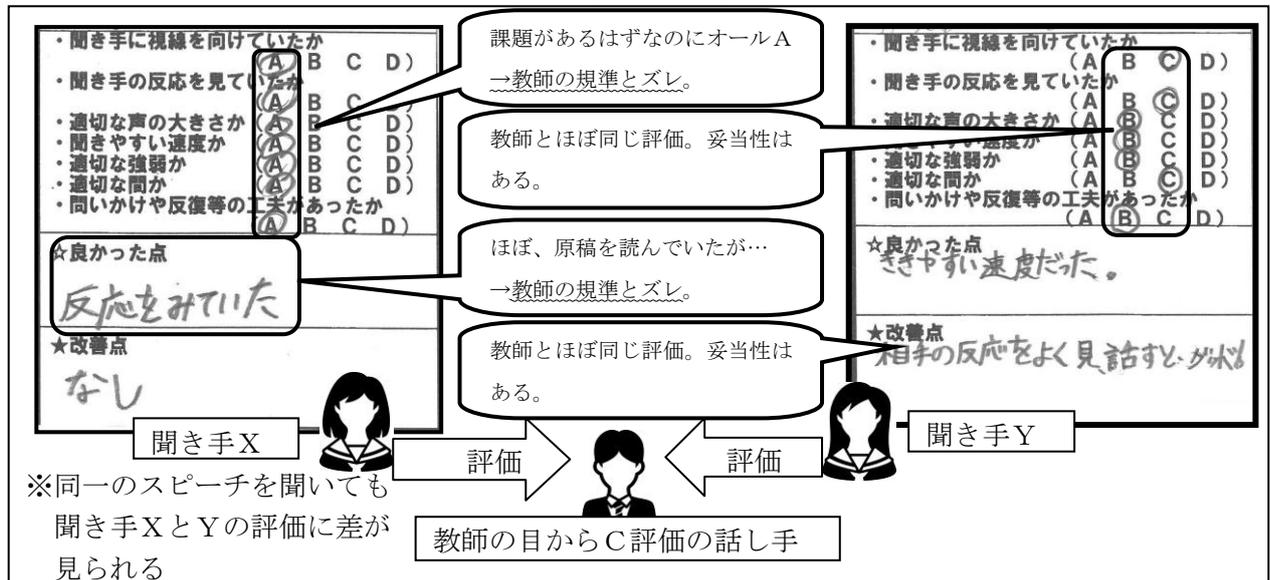
② 評価の実際

表5 スピーチ時の評価規準

	スピーチ時の相手への意識	スピーチ時の表現の工夫
概ね満足できる状況 (B)	スピーチの柱だけでスピーチし、顔を上げて相手の反応を見ている。	・適切な音量、速度でスピーチしている。 ・適切な強弱と間を取っている。
十分満足できる状況 (A)	スピーチの柱を見ずにスピーチし、顔を上げて相手の反応を見ている。	・適切な音量、速度で話している。 ・適切な強弱と間を取っている。 ・問いかけや反復等の工夫がある。
努力を要する状況 (C) と判断される生徒への手立て	スピーチの柱でスピーチできないなら、原稿を見ながらスピーチするように促す。	・大きな声でスピーチするように促す。

表5のようにスピーチの評価を2観点で捉え評価規準を設けた。実際のスピーチ時に教師が見

取って評価した。教師が評価した 117 人の結果はA→40 人、B→55 人、C→22 人となり 81% (95 人/117 人) が概ね満足できる状況以上であるという結果がでた。次に教師がC評価をつけた生徒の周りの評価カードを比較すると、生徒によっては評価に大きなズレがある場合も見受けられた(資料8)。話し手に対して話す観点の明確化は図ったが、聞き手の評価のカッティングラインまでは明確に提示していないためだと考えられる。



資料8 評価カードの比較

VI 研究の成果と課題

1 研究の成果

- (1) スピーチの土台である、取材・構成から実際のスピーチまでの学習過程をまとめたP Sシート(ポートフォリオ型スピーチシート)を活用したことで、伝え合う意欲と相手の反応を踏まえて適切に表現し伝え合う力を育むことができた。
- (2) 話す観点を明確にして、お互いに評価しあったり、機器を用いて評価したりする客観的評価を取り入れたことで、自分の課題を認識し克服することができ、伝え合う力を育むことができた。
- (3) 話し手は原稿を見てスピーチするのではなく、相手の反応を踏まえて表現を工夫することにより、相手をより意識してスピーチすることができ、また、聞き手もスピーチに対して反応し評価することで、伝え合う力を育むことができた。

2 研究の課題

- (1) 相手の反応を見て表現を工夫することはできているが、話すことに対する苦手意識が取り除けていないため、多くの場面設定や段階的な指導方法の工夫や支持的風土をつくる必要がある。
- (2) 評価規準を明確化し、評価者(聞き手)の能力の育成を図る必要がある。

〈主な参考文献〉

文部科学省	『中学校学習指導要領解説編 国語編』		2018年
富山哲也 著	『中学校 新学習指導要領 国語の授業づくり』	明治図書出版	2018年
植山俊宏・山本悦子編著	『話す・聞くー伝え合うコミュニケーションカー』	東洋館出版	2017年
河野庸介・宗我部義則 編著	『中学校国語科新授業モデル 話すこと・聞くこと編』	明治図書出版	2011年
堀裕嗣 著	『発信型授業で「伝え合う力」を育てる』	明治図書出版	2003年